

コロナウイルス文献情報とコメント(拡散自由)

2022年9月2日

BMJ:

感染から2年以上も精神神経症状が続く人々がいる

【松崎雑感】

コロナ感染後、ブレインフォグや認知機能障害が若干増えるようだという論説です。新型コロナが全身の炎症をもたらす病気であることを考えると、脳神経にも炎症をもたらして、脳機能を低下させることは十分考えられます。そもそも味覚嗅覚障害も脳神経の障害ですから、発症時期は別として、急性コロナにおいてもロングコロナにおいても、精神神経症状が出ることに留意する必要があるでしょう。

感染から2年以上も精神神経症状が続く人々がいる

Wise J. Covid-19: Increased risk of some neurological and psychiatric disorders remains two years after infection, study finds. *BMJ*. 2022;378:o2048. Published 2022 Aug 17. doi:10.1136/bmj.o2048

新型コロナ感染から2年以上経っても、精神疾患、認知障害、痙攣、ブレインフォグなどの疾患が後遺症として続いている例が多いことが分かった[1]。

これは他の呼吸器感染症ではそれほど見られない状態である。

しかし、当初後遺症として懸念されたうつ状態や不安状態は、最初の2～3か月で軽快し、2年以上継続する者は見られなかった。

オクスフォード大学のチームは、米国の医療データベースTriNetXを用いて、精神神経疾患14種の罹患状況を2年間追跡した。

新型コロナ感染者125万人を症例群として、同数の他の呼吸器感染症患者を対照群として、82個の交絡因子についてマッチさせた。

小児は他の呼吸器感染症と比べて新型コロナ感染後に2倍てんかん発作を起こしていた（コロナ260/1万、他130/1万）。また、精神疾患も3倍多かった。ただし1万人あたり18人だったが。

しかし、小児は成人よりも新型コロナ後の精神神経疾患頻度は少なかった。

さらに、6か月経過しても、他の呼吸器感染症の場合よりも、不安やうつ状態の度合いは少なかった。小児ではブレインフォグのリスクも一時的に高まるだけだった。

変異株別に見ると、オミクロン株感染後の症状は他の株より軽く、死亡率は低かった。しかし精神神経疾患の率は同様だった。

この成績はLancet Psychiatryに掲載され[1]、**新型コロナ感染の最初の数か月に精神神経疾患が増加するというこれまでの報告を再確認した**[2,3]。

著者らは、いくつかのリミテーションを挙げている。発症時期と継続期間が不明である、無症状感染者や軽症感染者が対象から除外されている可能性がある、ワクチン接種歴不明例が少なからずあるなどである。

調査の主宰者でオクスフォード大学のNIHRアカデミック・クリニカルフェローのマックス・タケ氏は、うつ状態と不安状態が最初の3か月でほぼ消失したという知見を「とても安堵できる内容だ」と評価する。

しかし、サイエンス・メディアセンターの記者会見で「しかし、ブレインフォグ、認知機能障害、痙攣などの精神神経疾患が2年経っても継続したり新たに出現していることは懸念材料である」と述べている。

この調査では、65才の人々の認知機能障害率はコロナ後4.5%、コロナ以外感染症で3.3%だった。タケ氏は「津波レベルではないが、認知機能障害があるという事は無視できない状態だ」と語った。

監視の必要

この論文の著者らは、市民も医療者も、コロナ感染から月日が経って新たな障害が出現するおそれもあると警告している。

「パンデミックが落ち着いても、相当期間新たな後遺障害が発生するおそれがあることを考慮に入れて対応できる体制を持続することが必要だ」と。

共著者でオクスフォード大学精神科教授ポール・ハリソン氏は会見で「これらは重要な知見だが、コロナ後遺症としての精神疾患について、必要以上に怖れる必要はないが、無視すべきでもない」と述べている。

「取るに足らない状態が否定できず、重大な疾患が発症する場合もある。また、特別な治療の不要な場合もある」

彼は、もともと、小児と若者に対するメンタルヘルスケア資源が不足しており、コロナは、それにさらに負担をかけるだろうと結んだ。